

『浜町アーケードのサンマルクカフェ』

磯島（いそじま）

永井（ながい）

磯島、隅の席でアイスコーヒーを飲んでいる。

永井「あ。」

永井、トレイを持って近づいてくる。

永井「あ、どうもー。永井ですー。磯島さんですよ。」

磯島「ああ、です。初めまして。」

永井「こちらこそー。すみませんね、お待たせしてしまっ。」

磯島「いえ、ちょっと早く来たんで。」

永井「申し訳なかくです、急に。」

磯島「いえ。」

永井「アイスコーヒーですか？」

磯島「え。」

永井「それ。」

磯島「あ、はい。」

永井「私ん前に並んどったひとも、前ん前に並んどったひとも、アイスコーヒーでした。」

磯島「ああ・・・ですか。」

永井「率、高いですよ。」

磯島「ええ、まあ・・・。」

永井「私もそうなんですけど。」

磯島「甘い物、好きなんですか？それ。」

永井「プリンアラモードです。好きで。あ、なんかすみませんね、自分だけ。」

磯島「いえ、よかですよ。僕甘いのがあんまり好きじゃないんで。」

永井「あ、だから。」

磯島「え、」

永井「シューって。スレンダーで。ね。」

磯島「そうでもなかです。腹んまわりとか。」

永井「ですか？」

磯島「ですよ。見えただけで。」

永井「磯島さん、わたしも 35 なんですよ。」

磯島「あ、年？ああ、そうなんですか。」

永井「ですー。同年ですー。乙女座・A型の。」

磯島「ああ、全部一緒なんですね。」

永井「いや、劇団のホームページでね、プロフィールば拝見しまして。」

磯島「ああ。」

永井「一気に親近感の湧いたとです。はははー。」

磯島「ははは・・・。」

永井「えーと、改めまして、ふれあいシルバー・長寿の会、永井<sup>ながいしんさく</sup>紳作と申します。」

磯島「あ、劇団 OTAKUSA・代表の磯島<sup>いそじまきみのぶ</sup>公信です。」

永井「すみませんね、急に、お電話してしまつて。」

磯島「番号はどちらで。」

永井「ホームページに。」

磯島「ああ。滅多にかかってこんもんですから。」

永井「あらま、そげなもんですか。」

磯島「はい。問合せとか、くるのはほとんどメールで。」

永井「ですかー。『OTAKUSA』って、紫陽花ですよ。」

磯島「ええ。」

永井「よかですね、地域に密着して活動するという姿勢が名前にも出とりますよ。」

磯島「ですかね。」

永井「出とります、ばりばり出とります。」

磯島「それはどうも・・・。」

永井「磯島さん、ご出身は？」

磯島「佐賀です。」

永井「あ、そうなんですか。」

磯島「ええ。こっちに進学したもんですから、そのまんま。」

永井「ですかー。」

磯島「妻はずっと長崎です。」

永井「わたしもずっと長崎市内です。」

磯島「出たことは？」

永井「なかです。そうですかー。どうですか、外んひとから見て。長崎は。」

磯島「あー、けど、もう学生んときからずっと暮らしとりますから。」

永井「坂と老人の多か町。」

磯島「はあ。」

永井「そう思いませんか？」

磯島「ああ・・・。」

永井「あ！磯島さん、えーと、しんくり・・・てんくりよ・・・って何かご存じですか？」

磯島「え、」

永井「しんくりてんくりよ、とかなんとかいう、呪文みたいな。」

磯島「なんですか、それ。」

永井「さっき眼鏡橋ところで小学生のそげんことば唱えながら走っていったとです。」

磯島「はあ。」

永井「アニメかなんかでしょうかね。」

磯島「いやー、知らんですけど。」

永井「なんやろか・・・。」

磯島「流行っとするんですかね。僕は知りませんけど。」

永井「男ん子がふたりして唱えながら、元気に走っていきました。子どもは町ん希望です  
たい。」

磯島「・・・えーと、永井さんは具体的にはどういうお仕事で・・・？」

永井「ああ、いきいき長寿推進インストラクターです。」

磯島「その、お電話で話されてた、老人ホームやグループホームの支援というか。」

永井「そうですね、高齢者ん方々が健康で生きがいのある生活を送るためにいろんな企画  
を立案したり、実際にイベントを運営したりですとか。」

磯島「ええ。」

永井「あと、たとえば今回磯島さんにご相談させていただく、シルバー世代を中心とした  
劇団づくりみたいなことをですね、あちこちの施設さまにご提案しとります。」

磯島「反応はどんなもんですか？」

永井「施設の？」

磯島「ええ。」

永井「正直申し上げますとですね・・・、まだ浸透しとるとは言えないですね。なにか入  
所者様自身の大きな目標になる活動を受け入れるというようなことが。」

磯島「(うなづく)。」

永井「特に新しかことてなると、なかなか理解が・・・。」

磯島「だと思えます。」

永井「私の亡くなった祖父がですね、70近くってから日本舞踊をやりだしまして。」

磯島「へー。」

永井「近所に花柳流ん先生の住んどりましてね。先生言うても、昔からのご近所ですから、  
原んスミちゃんと言うとりました。本名が原スミエさんちゅう方で。」

磯島「その、スミちゃんの教室に通われて？」

永井「です。隣んグランドゴルフ仲間んじいさんと一緒に。」

磯島「へえ。」

永井「日舞言うても長唄とかじゃなかですよ。簡単な歌謡曲なんかをね、習って、親戚ん  
集まりなんかで披露しとりました。得意げで、楽しそうでね。」

磯島「ええ。」

永井「肝臓がんで入院するまで、10年近く習いに行とったです。」

磯島「踊ることが好きだったんでしょうね。」

永井「それもですし、スミちゃんや隣んじいさんや他んお弟子さんたちと、わいわいお茶  
ば飲んだりする時間も楽しかったんじゃなかでしょかね。」

磯島「ええ。」

永井「ほんとに、よか一時間ば過ごしとりました、じいちゃんは。いくつになっても必要  
な時間ですたい。」

磯島「僕たちもやがては、ですもんね。」

永井「です。それでまあ、戻りますけど、こげな仕事を。」

磯島「ええ。」

永井「シルバー世代ん劇団も、最近は増えとるみたいで。」

磯島「ですね。シニア演劇ん大会なんかもありますね。」

永井「じゃから、長崎でもそげな劇団の出来んかな、て思うたとです。実現するためにも  
OTAKUSA さんのご協力が必要なんです。」

磯島「あの・・・、いいんですかね、僕らで。」

永井「もちろんもちろん。磯島さん、ご活躍じゃなかですか。」

磯島「いや、そんなことはなかです。」

永井「こん前も新聞に OTAKUSA が東京で公演、て。」

磯島「ああ。」

永井「ええ、ええ、だからもう、お願いして間違いなかやろて話になって。」

磯島「いえ、そんな。」

永井「長崎んシルバー文化をぐぐーっと、こう、ねえ。」

磯島「ああ、はい・・・。」

永井「どうでしょうか。」

磯島「ちょっと、考えさせてもらってもよかですか。」

永井「もちろんもちろん。ひとまず持ち帰って劇団員のみなさんとも相談してもらえたら。」

磯島「ですね。」

永井「あ、忘れとりました！企画書ば。」

永井、鞆から企画書を出し、磯島へ手渡す。

磯島「あ、どうも。」

永井「すみませんねえ、先に出さんばですね。もう、ほんとに。」

磯島「ああ、いえ・・・。」

永井「ぜひ前向きに、ご検討いただければ。」